

宮坂純一 著

企業パーパス言説の もう一つの解釈

マネジメントと金儲け

*Alternative
interpretation of
Corporate purpose discourse*

奈良マネジメント研究オフィス



宮坂純一 著

企業パーパス言説の もう一つの解釈

マネジメントと金儲け

*Alternative
interpretation of
Corporate purpose discourse*

奈良マネジメント研究オフィス



はじめに

SDGs が時のコトバであり、さまざまな分野で注目され、その実現を目指して諸々の方策が展開されているが、企業レベルで言えば、それは社会（ステイクホルダー）に対して企業としての責任を果たすことを求める動きである。その意味で、SDGs は 1960-70 年代の企業の社会的責任、1990 年代の CSR に続く、第 3 世代の企業社会的責任論である。そのような流れを具体的に示しているのが企業パーパス（企業目的の見直し）である。

企業の再定義を国際的なレベルで求める動きは今回がはじめてではなく 1990 年代に、スローン財団の援助を得て、ウェブ上で「株式会社再定義プロジェクト」が展開された。このプロジェクトの目的は、多くの研究者を動員して、企業の性質、目的そしてガバナンスを研究し分析することであり、その意図は、メールやウェブを介した「対話」、国際的な調査ネットワークの構築と一連の会議の組織化、セミナーと関連したプログラムのイベント、等々によって実行に移された。

1995-2000 年にかけて公開された 5 つの出版物はその成果であり、ポストたちの定義もそのなかのひとつであり (Post, J.E., Preston, L.E. and Sachs, S., *Redefining the Corporation: Stakeholder Management and Organizational Wealth*, Stanford University Press, 2002, p.229.)、長らく、ウェブで、「現代企業はステイクホルダー企業である」との現状認識が「ステイクホルダー企業モデルに関するコンセンサス・ステイトメント」(Consensus Statement on the Stakeholder Model of the Corporation) として公開されてきた (<http://www.mgmt.utoronto.ca/~stake/Publications.htm> 2004/08/28 現在は削除されている)。

その声明書にはつぎのように記されている。「企業の目的 (purpose) は富を

生み出すことである。意図的あるいは結果としてであろうとも富の創造過程に参加している個人ないしはグループは企業のステイクホルダーズである。ステイクホルダーズは、インプットを提供し、経費を負担し、不便さまたは害を経験することによって富の創造に参加する。彼らはそのプロセスにおいて何らかの危険にさらされている。便益が予想よりも少ないこともあるし、あるいはコストや損害が予想以上に大きいこともあろう。すべてのステイクホルダーズの役割と関心事を考慮に入れ、貢献とリスクそして便益の効率的な組み合わせを達成しようとするのがステイクホルダー・マネジメントである。いかなるグループであろうとも唯一つのステイクホルダーの利益をアンバランスな形で追求したりなんらかのグループに便益以上の不当な貢献を求めることは長期にわたって持続可能な富を創造することとは相容れないものである」。

このプロジェクトの進行につれて、現代企業に要求される責務（義務）として5つのことが提示されるようになったが、その後整理されて7原則として公式化されている。

- 1)ステイクホルダーズの関心事を認知し監視すること、
- 2)ステイクホルダーズに耳を傾け意思疎通すること、
- 3)ステイクホルダーズが受け入れられる行動様式を身につけること、
- 4)ステイクホルダーズ間の相互依存関係を認識し経営活動の便益と負担を公平に配分すること、
- 5)企業活動から有害な結果が生じないように外部の各種機関と協力すること、
- 6)ステイクホルダーズの利益に反する行動を回避すること、
- 7)自らの役割と他のステイクホルダーズに対する責任の間には潜在的な対立があることを承知しておくこと。

企業パーパス論（→ 企業の再定義）の流れには1990年代と比べるとより多くの実務畑の人々（経営者やコンサルタント）が参加しているという特徴が見られるが、それ以外に、企業パーパス論はCSRの何を引き継ぎ、そしていかなる点で異なっているのであろうか？

本書は、以上のような問題意識のもとで、企業パーパス言説の内容を確認し

たあとで、第2世代の社会的責任論（CSR）の理論的基礎のひとつとなったステイクホルダー・セオリーを唱道してきた研究者たちの言説を借りて、企業パーパスの意味を再確認し、その後、本書の立場から、すなわち、目的と手段の転倒という視点から、企業パーパスが見直されていることの意味を改めて確認するものである。

宮坂 純一

2022/05/05

目次

はじめに

第1章 企業パーパス論の概要 — 桜井徹氏の所説に学ぶ	… 1
第1節 ふたつのパーパス論	… 2
第2節 パーパス論の意義と限界	… 14
第2章 ステイクホルダー・セオリーから見た企業パーパス言説 — フリーマンの所説を読み解く —	… 19
第1節 フリーマンの基本的な考え方	… 19
第2節 ステイクホルダー・セオリーと企業パーパス	… 36
第3章 企業パーパスと「目的と手段の転倒」	… 53
第1節 目的と手段の連鎖という視点	… 56
第2節 企業目的と「目的と手段の転倒」	… 63
第3節 「目的と手段の転倒」から読み解く企業パーパス言説	… 65

企業パーパス言説のもう一つの解釈

マネジメントと金儲け